

イギリスの現状： 1992-1993年 Sussex 大学の場合

上越教育大学 内 藤 美 加

筆者は、東京都立大学に在職中の1992年10月から1993年9月までの1年間、Sussex 大学 (University of Sussex) 実験心理学研究室 (Laboratory of Experimental Psychology) に客員研究員として滞在した。この滞英に至るきっかけは、当時の講座主任の Dr. Alan Parkin が、“Implicit memory (潜在記憶)” というタイトルの記憶に関する編集本のうち筆者が寄稿した章の査読を担当したという経緯からであった。Dr. Parkin の主な研究領域は、記憶障害者を対象とした記憶の神経心理学的な研究である。現在の彼の関心の1つは、先の編集本の主題である潜在記憶であり、彼もまた同書の執筆者の一人であった。筆者の研究上の関心は、この潜在記憶と並び、健全な幼児及び自閉症児の心の状態を理解する能力 (これを“心の理論”と呼んでいる) の発達にあった。当時、Sussex 大学の実験心理学研究室には、心の理論の研究を精力的に行っていた Dr. Josef Perner も教授スタッフとして在職していた。そのような折、Dr. Parkin から、Sussex 大学に研究員として訪問するよう招きを受けたのである。滞在中は、日常の雑務や義務から解放され、日本で収集した実験データの分析とそれをもとにした論文執筆を行うことができた。Dr. Parkin は精力的な研究者にありがちな多少短気なところがあったが、筆者のスポンサーとして、論文の内容はもとより、英語表現についても親切で的確な助言をしてくれた。また Dr. Perner とその研究員や大学院生たちとは、彼の学部生対象の講義や、研究会、共同研究などを通じて一緒に活動することができた。得られたデータは十分ではなかったものの、彼らとともに幼児の心の理論に関する実験を計画し、ブライトン (Brighton) 市や隣のホーブ (Hove) 市の保育園や小学校を訪れたりした。

以下に、Sussex 大学大学院課程実験心理学専攻での実態に即したイギリスの学位取得の現状を、筆者の滞在中の見聞に基づき紹介してゆく。

Sussex 大学と実験心理学研究室について

1. Sussex 大学

Sussex 大学は、イングランド南東部サセックス州の海岸沿いの街ブライトンの郊外にある。人口約15万人のブライトン市は、ロンドンから鉄道か車で真南に約1時間のところに位置し、ヴィクトリア王朝時代からの海水浴の発祥地、あるいは高級保養地と

して知られ、現在でも保守党の党大会が定期的に行われるなど、各種会議の開催地として国内外から訪れる人が多い。Sussex 大学は、このブライトンから国鉄で2つめのファルマー (Falmer) という小さな駅の前にあり、ブライトン市と、隣接する中世からつづく小さな街ルイス (Lewes) 市に挟まれた郊外の、なだらかな丘陵地帯 (この地方一帯は “the South Downs” と呼ばれている) の一角に建っている。Sussex 大学は、学際的な研究機関創設を目標として、イギリス政府により1961年に設立された。少なくとも100年以上の伝統をもつ古い大学が多いイギリスのなかでは、その創立の経緯、大学の組織、教育体制などにおいてユニークな新しい国立大学である。そうした事情を反映して、キャンパスの建物も新しく、他の大学が持つような重厚な雰囲気には乏しいものの、逆に新進気鋭の活気に満ちた大学であった。

Sussex 大学は、イギリスの他の多くの大学が一般的に学部・学科で構成されているのと異なり、一群の関連領域を学際的にカバーする10の学系 (Schools of Studies) から構成されている。学系は、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、イギリス、アメリカなどの地域研究・文学研究や文化と共同体などの人文学、及び社会科学、芸術などからなる文科系の文化・社会研究領域 (Arts and Social Studies) と、生物科学、化学、数学と物理学、工学などからなる理科系の科学・工学領域 (Science and Engineering) に大きく二分されている。各学系は、関連する領域でおおまかな講座 (Divisions, Subjects, Subject Groups 等) を構成し、大学院の様々な専攻分野を提供している。実験心理学研究室は、文化・社会研究領域の中の心理学講座とは全く独立に、理科系である科学・工学領域の生物科学系 (School of Biological Sciences) の一講座として運営されている。

2. 実験心理学研究室の規模

実験心理学研究室は、Oxford 大学など、伝統のある大きな大学の心理学科に比べてその規模は小さい。1学年あたりの学部学生数は約70名、また93年当時で個人の研究室を持つ講座構成員は83名であった。これらには、14名の教官の他に、各教官のもとで3～5年毎の契約で各学術審議会から研究費を取り、主に研究を専門に行う立場の研究員が約20名、大学院生約20名、修士課程の学生約10名、他に教育助手や技官・事務員などが含まれる。

講座の施設は他大学とほぼ同様で、教官1人1室、それ以外は2人1室の各個別研究室の他に、防音室や動物実験棟を含む各種実験室、図書室などが設けられていた。各個別研究室、共同端末室、計算機室の端末からは、講座専用の大型計算機へ、さらに大学のメイン・フレームへと接続されており、私信の他、学内情報並びに大学の教員 (研究員) 募集や学会案内などの学外情報の伝達に電子メールが日常的に使用されていた。また、大学の図書館や学外のデータ・ベースへのアクセスは、研究室のどの端末からでも可能であり、文献検索には不自由しなかった。

実験心理学研究室の教官はそれぞれ、各学年4～6人計15～16人の学部学生と最大3人程度の大学院生や修士課程の学生を指導していた。実験心理学研究室は、イギリス政府が全国の大学や研究機関を対象として実施する学術研究の水準に関する査定で、最高（5つ星）の評価を得ていた。この査定は、政府やその外郭団体である各学術審議会からの補助金や奨学金の支給額に大きく影響する。こうした高い学術水準の研究機関では、人的資源や施設、研究費の面で充実しており、教官は基本的に研究と教育に専念できる体制が整っていた。

イギリスの大学・大学院の教育課程について

1. 学部・修士課程

イギリス（スコットランド地方などの一部を除く大部分）の大学では、学部の教育に3年間が充てられ、大学院教育とは、通常約3～4年間の博士課程を指す。これ以外に、1～2年間の修士課程を設けているところもある。学部の高学年向けの授業と修士課程の授業は重複していることが多く、かなり専門的な内容である。Sussexでは、大学院の授業が設けられていないこともあって、博士課程の初年度の学生が、主に自分の指導教官が行うこれら高学年向けの講義（lectures）を自由に聴講していた。筆者は、10月から1学期間開講されたDr. Pernerの“Mental Representation and Consciousness”というタイトルの講義を聴講した。この講義は、Dr. Pernerと、同じく教授スタッフのDr. Zoltan Dienesが、各々の研究領域（心の理論、潜在記憶と潜在学習、コネクションリスト・モデル等）でテーマごとに関連研究や論文の概要を解説したり、自分のデータを紹介してゆくものであった。受講対象者は学部の2、3年生ではあったが、内容からみて日本の大学の学部の水準というよりはむしろ大学院レベルに匹敵するような、かなり専門的で高度な講義であった。

Sussex大学では、10月を新学期とする3学期（term）制をとっており、1学期は10週間であった。初年度学生を対象とする一般教養レベルの講義は、2学期間続くことが多い。しかし、高学年を対象とする少人数（10～30人ほど）の一般的な講義は、多くの場合1学期間である。1回50分の講義が1週間に2～3回行われ、途中テーマごとに1～2週間に1回、講義や事前に手渡される多数の文献リストで紹介された論文や研究を学生が発表して紹介する演習（seminars）が行われる。合間に数回のレポート（essays）提出が課せられ、それが成績評価の対象となっていた。これ以外に学部や修士課程の授業として、方法論や統計学の講義や実習（practicals）と、実験実習、教官や研究員の指導による個人別の卒業研究（the third-year project）や、それにつながる学生数人からなるグループ単位の個別指導（tutorials）などが設けられている。

学部の卒業試験は、学内2人、学外1人の審査官によって、学生が2年目以降に提出した各種レポートや卒業研究、口頭試問などの成績を総合して評価される。この評価で、例えば100を満点として、30%以上が最低の学位取得要件であり、以降40%以上が

3rd, 50%以上が lower 2nd, 60%以上が upper 2nd, 70%以上が 1st という順に異なる階級の学位が与えられる。大学院進学のための卒業試験の成績取得要件は60%以上であり, lower 2nd の者はさらに修士課程を修了後に応募資格が得られる。こうした訓練を受けて学士や修士の学位を得ると, BPS (British Psychological Society: 英国心理学会) の会員資格が得られる。この会員資格は, その後臨床心理学や教育心理学などの応用分野での訓練を受ける場合の必要条件となっている。

2. 大学院

博士課程への応募者の選考は, 通常3月末頃の締切に合わせて応募者から提出される学部卒業試験の成績及び研究計画書など, 学生の資質に関する資料と, 後述する奨学金の割り当て額によって, 7~8月頃決定される。したがって, 日本の一般的な大学の場合と異なり, 博士課程への入学要件として修士課程の修了は必ずしも必要ではない。前述したように, 博士課程に応募するために修士号取得が必要となるのは, 例えば学部の卒業試験の得点が大学院進学のための要件に満たない50%であった場合などである。また Sussex 大学では独自に, 他の学問領域で学士号を持つ者が大学院に進学を希望する場合などに, 修士課程を履修できる制度を設けていた。このように, 大学卒業後すぐに大学院に進学すればかなり若年で博士号を取得できることになる。しかし実験心理学研究室の大学院生には, 卒業後一度就職してから退職して大学院で学び直している学生や, 国外からの留学生もおり, 平均的には20代後半の学生が多いように見受けられた。

イギリスの大学の多くは, 一部の例外を除いて, 大学院生のための授業を開講していない。大学院生は, 自分の指導教官から個別に指導を受ける。また大学院生が, 学部学生に対する演習や個別指導, 講義などを受け持ち, 教官を補佐する形で教育活動に参加することもある。こうした活動には, 担当した大学院生に対して大学から報酬が支払われ, これが数少ない大学院生のアルバイトとなっている。

実験心理学研究室では正規の授業の他に週1回ずつ, 月曜昼食時にランチタイム・セミナー (Monday Lunchtime Seminars) という研究発表会が, 木曜夕方にもコロキウム (Colloquium) という講演が催されていた。ランチタイム・セミナーでは, 研究室の教授スタッフ, 研究員, まれに大学院生が, 自分の現在の研究について30分程度で研究発表を行う。聴衆である研究室の構成員は, 時には実際にサンドウィッチなどの昼食を取りながら, 発表を聴き質問をして, 発表者と討論をする。このような研究会を通じて, 研究室の構成員相互の研究の理解や共同研究の促進を図っている。一方, コロキウムでは, 多くは学外から研究者 (心理学関連領域の研究者を含む) を講師に招いて, その人の専門分野のテーマや研究内容について1時間程度の講演をしてもらう。この講演の後にも30分ほどの質問や討論がある。最後にこの講師を招いたスタッフとその研究員や大学院生が, 講師とともに夕食に出かける。筆者も, Dr. Pernerらが招いた Birmingham 大学の Dr. Elizabeth Robinson や当時 Swansea 大学の Dr. Peter

Mitchell の夕食会に同席した。

Sussex 大学にも多くの留学生がいる。彼らは、近隣のヨーロッパ諸国から来ている者が多く、実験心理学研究室の大学院でも、イタリア、オランダ、ポルトガルなどからの留学生が学んでいた。もちろんアジアやアフリカからの留学生も在籍している。ただし、これまでイギリスの大学は、同じ英語圏のアメリカの大学ほどには、徹底した語学教育をしてまで英語力のない留学生を広く受け入れる体制を明確に打ち出してはいなかったようである。例えば、Sussex 大学大学院の外国人向け入学案内を参照すると、実験心理学専攻で要求される英語能力は、英国文化協会 (The British Council) の試験 (IELTS) で各セクション 6.0 以上、もしくは TOEFL 及び TWE の両方で 550 点と 4 点以上の得点を取得していることという、かなり高度なものである。このような高い英語力が要求される要因は、イギリスの大学院教育の方法にあるのではないと思われる。後述するように、イギリスの大学院では、必修の授業はほとんどなく、学生の主体性に任された教官との話し合いで指導が進んでゆく。こうした場では、入学直後から、思考や論理の組立てとその表現の手段として、英語が支障なく使えることが前提となるからである。確かにイギリスにいる留学生の多くは、自国で英語の高等教育を受けてきていたり、自国語以外にも英語を使用することが多い環境に暮らしていた場合が多く、言葉に関する障害はあまり大きくないように見受けられた。実験心理学研究室のオランダやポルトガル留学生も、大学院入学時にはすでに数年の滞英期間を過ごしていたということだった。

論文作成について

1. 年限

前述したように、博士課程の年限は通常約 3 年である。イギリスでは、大学院生の受け入れは、各大学の学科や講座の研究・教育活動の実績に応じて、SERC (Science and Engineering Research Council) や MRC (Medical Research Council) 等の機関から給付される quota grant と呼ばれる奨学金に依存している。言い換えるならば、各学科や講座は、こうした学術審議会から支給された奨学金の額に応じて、当該年度に何人までの大学院生を受け入れるかを決定する。講座に所属する教官の合議によって、研究計画書に基づいて各学生に奨学金を割り当てるのである。各学術審議会は、大学当てに支給する quota grant 以外にも、直接学生が応募し、合格すれば直接学生当てに支給される appeal grant と呼ばれる奨学金を用意している。しかしその額は少なく、実際には取得は難しい。このように博士課程の年限は、各大学院生の授業料、研究費、生活費をすべて賄うこうした奨学金の給付期間が通常約 3 年であるという制約に基づいている。

Sussex 大学では全日制の博士課程の学生の必要最低在学期間を 6 学期 (2 年間) としている。そして、この在学期間終了後 2 年までの間であれば、いつでも論文を提出す

ることができる。またこの期間を越える場合は、改めて大学から在学期間延長の許可を得なければならない。つまり、博士課程開始から約3～4年、どんなに長くとも5年までの間に論文を作成することになる。実験心理学研究室では最終的には課程開始後3年間で論文を提出させることをめざしている。

先に、大学院生の生活費が奨学金で賄われると書いた。この生活費は、衣食だけでなく、共同でフラットを借りて住む程度の住居費や、映画やパブに出かける程度の際費を十分にカバーしている。イギリスでは、日本のように塾の講師や家庭教師などのパートタイム労働の需要がほとんどないために、学生は副収入があまりなく贅沢は全くできない。しかし、逆に奨学金だけで学生が研究に専念できる体制となっている。物価水準の違いもあり、日本の制度と一概に比較はできないものの、国家が学生の生活を全面的に援助するという点で、イギリスの奨学金制度は非常に充実していると感じた。

2. テーマの決め方

指導教官は、まず自分の研究領域の概要を学生に開示する。各学生はその領域内で自分の研究計画をたてる。この研究計画は当初はあまり詳しいものではなく、ここで学生が自分の研究の出発点となる問題や方法論上の大まかなアイデアを提起する。これを、指導教官との話し合いによって徐々に具体化してゆく。指導教官の側に一連の具体的な研究課題がある場合には、それに沿った形のかかなり具体的な研究計画になることもある。しかし一般的には、実験などの具体的な方法論も含めて、学生が主体的に自分自身で研究内容を考えることが期待されている。

3. 指導のプロセス

基本的には、博士課程の学生に対する定期的な面会は設けられていない。したがって、学生が自分の必要に応じて、当面の問題を指導教官に相談することが一般的である。なかには定期的な面談を好む指導者もいるが、少数派である。こうした不定期の面会の他に、学生が自主的に他の講座や学系にわたって研究領域の近い学生、研究員、教官などを交えて研究会を開くこともある。Dr. Pernerの大学院生が文科系心理学講座のDr. George Butterworthらと行っていた研究会では、新刊書の読み合わせや、参加者が新しく行った実験の報告などが形式にとらわれずに行われていた。

学生に対しては、教官による個人的な指導以外に、研究室としての指導もある。実験心理学研究室では、毎年各大学院生が、自分の研究についての報告書を書くことが義務づけられていた。また年1回、通常は各年度の最後にあたる7月初め頃、学会やその他の研究上のコミュニケーションの技能を磨くという目的で、研究発表を行うことが要求されていた。これは、発表会の準備や司会などの運営をすべて学生が担当し、一人一人が制限時間内（初年度学生が15分、上級生は30分）に発表を行い、会場の教官や他の学生の質問を受けるという形式で行われる。また、この発表会に先立って、修士課程と

博士課程の学生を対象として、大学所有の施設で研究発表でのプレゼンテーションの仕方やディスカッションのスタイルを会得するための合宿が、学術審議会からの資金補助により研究室主催で行われていた。先に、イギリスの大学では一般的に大学院の授業がないと書いたが、実験心理学研究室では、大学院生のための上級統計学の必修の授業があった。

この他に、大学院生は自分の研究に関係の深い領域の学会に出席することも奨励されていた。実験心理学研究室では、学生が申請すれば、その参加費の大部分と交通費を研究室の予算から拠出していた。イギリスの学会は、部会に分かれての小規模なものが独立して開催されることが多い。その多くは例年、秋の新学期前、冬のクリスマス休暇や春のイースター休暇前などの休業期間の3日間ほど、各学会毎に特定の時期に主催校内で開かれる。筆者は、滞在中にBPSのロンドン会議やCambridge大学で開催された実験心理学部門の年次総会などに出かけた。また執筆した論文に用いたデータを発表するため、Birmingham大学で開催されたBPSの発達部門の年次総会に参加する機会を得た。主催校は、研究発表の会場だけでなく宿泊施設についても、参加者に学生宿舎や大学の食堂を低料金で提供することが一般的なので、学会は文字どおり大学内で開催される、という印象を受ける。筆者の参加したCambridgeやBirminghamの学会でも、会期が休暇中であったために、学生が明け渡した学生寮内の部屋に宿泊するという体験をした。学会での発表形式は、口頭発表が多く、別にポスター発表を設けている場合もあり、1人が複数の発表に応募することもできる。発表内容に実証的研究・理論的研究の制限はなく、応募時に提出された規定の長さの要約論文が主催校の審査にかけられ、たいていの場合受理される。口頭発表の時間は、質疑を入れて30分というのが一般的であった。また、午前中と午後の各セッションの合間に設けられたそれぞれ30分間ほどのお茶の時間や開催日の夕刻のワイン・レセプションと最終日の夕食会など、大学院生も混じっての研究者同士の交流をはかるようなプログラムが一般的である。こうしたイギリスの学会は、発表件数が多く過密なプログラム構成が一般的な大規模なアメリカの学会とは、好対照であった。

4. 論文の内容

論文の構成についての唯一のガイドラインは、行われた実験や調査が当該の研究領域において有意義で新しい貢献をしているか、という点のみである。博士論文の長さは、通常概ね80,000語ほどとされるが、明確な制限はない。また、含まれる実験や調査の数、それらが未発表のデータに基づいているか既刊の論文から成るかなどの点にも具体的な制約はない。したがって、論文の内容の評価は、純粋に審査者の決定にかかっている。

5. 論文審査

イギリスでは、提出論文の審査は、大学毎に多少の違いはあるものの、一般的に同様の審査方法が採られている。多くの場合、学内外から各1名ずつの審査者が論文審査にあたる。Sussex 大学でも、学内と学外から各1人ずつ、計2名の審査者によって審査が行われている。学内の審査者は、基本的に候補者を擁護する立場から、学外の審査者は候補者の論文を批判する立場から論文の査読を行う。査読の後、審査者と候補者の日程に合わせて適当な期間を置いて、約2時間程度の口頭試問が行われる。学内外の審査者がそれぞれの立場から候補者に質問をしてゆく形の試問であり、まれにこの席に指導教官が同席することを許す大学もあるが、一般的ではない。大学によっては口頭試問を公開している場合もあるが、Sussex 大学では非公開である。ドイツやフランスなどの学位取得のための口頭試問は、イギリスの場合に比べ、はるかに形式に厳しく、より多くの審査者や教官からの質問を受け、場合によっては家族も同席できる公開制を取っている。こうした点でも、イギリスの学位取得のシステムは、他のヨーロッパ諸国のそれとは非常に異なっている。

結果は試問直後に、候補者に対して伝えられる。即日で合格しなかった場合には、修正が必要となる。修正だけで済む場合もあるが、追加実験など大幅な修正の後再審査が必要な場合には、それぞれの論文にもよるけれども、約1年程度で修正し再審査にかけられる。この口頭試問以外に、学位認定のために特別な試験が行われることはない。

以上が Sussex 大学実験心理学研究室にみるイギリスの高等教育及び学位取得の現状である。イギリスの歴史と文化が長い時間をかけて培ってきた高等教育のシステムと、それを担っている学界や個々の研究者たちは、他の国々のそれらとは異なる独特の雰囲気を持っているように感じた。それは、一言でいうならば、近視眼的に促成の結果を求めるのではなく、あくまでも自分自身のアイデア、研究スタイル、仕事のペースを尊重し、必要な時間や資金をかけて独自の研究を進めて行く余裕と懐の深さである。こうした学風は、政府によって制度として支えられ、若い世代にも確実に受け継がれているように思われた。

— 受付 1996. 2. 16 —